68号

愛鳥教育

2003.6

全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育　No.68
2003.6

目　次

巻頭言
新たな愛鳥教育の輪が
広がっていくために ---------- 杉浦嘉雄　3

第２回 ジャパン バード
フェスティバル 2002 参加報告--- 箕輪多津男 4

平成14年度
千葉県愛鳥教育指導者研修会 ---- 根本順子　5

第３回
環境教育研修会 in YOKOHAMA
テキスト ---------- 堤　達俊　8

中国の朱鷺そして能登の朱鷺 ---------- 19

もりまき通信⑱
鳥にまつわる子供の名 ---------- 森　真希　24

書評
『タゲリ舞う里に』 ---------- 箕輪多津男 27

川
～生命を育み流れ続ける～ ------- 箕輪多津男 28

当面の事務局体制 ---------- 30

編集後記 ---------- 31

巻頭言

会員の皆様へ

新たな愛鳥教育の輪が広がっていくために

～事務局移転のお知らせとお願い～

全国愛鳥教育研究会　会長　杉浦　嘉雄

会員の皆様には、日頃より当研究会の活動にご支援ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

当研究会は、発足当初より㈶日本鳥類保護連盟内に事務局を置かせていただき、また、会の成長期には、印刷費等の資金援助までしていただきました。さらに、連盟のご厚意により、連盟の職員1名を当研究会担当として配置していただき、会員管理・会費管理・会誌や文書の発送と管理など、事務局としての業務を遂行していただいて参りました。

お陰様で、当研究会もこの8年間は独立採算で運営していけるまでに成長致しました。また、会員数も現在、法人会員も含めて300人近くになっております。

しかし、この不景気の影響は企業だけでなく、多くの公益法人にも押し寄せています。㈶日本鳥類保護連盟もその例外ではないようです。それで、理事会を重ねる中、これ以上連盟の負担を増やさず、かつ従来どおりの協力関係を維持しながら愛鳥教育事業を実施していく方策を検討致しました。

その結果、当研究会として、次の５つの事項を決定するに至りました。このうち、直接、㈶日本鳥類保護連盟に関係する（１）（２）の項目については、既に連盟の責任者の方にもご了承いただいております。

（１）平成15年度より、当研究会の事務局を、㈶日本鳥類保護連盟からNPO法人環境学習研究会へと移転する。

新しい事務局を置かせていただくNPO法人環境学習研究会は、当研究会常務理事の小野紀之氏が理事として所属している団体です。

※　当面の事務局体制についてはP30をご覧下さい。

（２）㈶日本鳥類保護連盟とは、従来どおりの協力関係を維持し、愛鳥教育事業を実施していく。

① 全国野生生物保護実績発表大会の審査協力
② 愛鳥ポスター原画コンクールの審査協力
③ 野生生物保護功労者の審査協力

（３）NPO法人環境学習研究会と協力関係を築き、新たな環境教育・野生生物教育事業を推進して、その成果と情報を会員に提供すると共に、広く社会にもアピールしていく。

① 研修会・講演会などの開催やフィールドワークの実施
② 機関誌「愛鳥教育」への実践事例や実践方法の取りまとめとその集積

（４）機関誌「愛鳥教育」について

扱う内容や対象については、野生鳥類に限定することなく野生生物にまで広げ、関心を高めたり理解を深めたりするための教育や保護に関する教育活動の実践はもちろんのこと、生息地の保全活動や持続可能な地域づくり活動など、多様な環境教育活動の実践も取り上げていく。

また、会員の皆様が研究・実践されている活動を公表できる場とするためのしくみづくりを検討していく。

（５）年会費

一般会員は、従来どおり、年間3,000円とする。

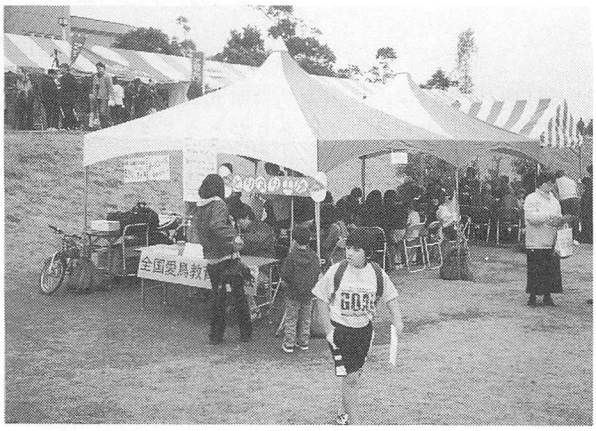
とりわけ事務局を移転し、㈶日本鳥類保護連盟の庇護の下から離れて、新たにNPO法人環境学習研究会との協力関係を築き、そこから再出発することは、当研究会にとって大きな試練でもあります。しかし、ぜひともこれを新たな愛鳥教育を展開していくための契機にしたいと考えております。

会員の皆様には、今後とも「新たな愛鳥教育」の創造に参画していただき、これまでにも増してご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「第２回 ジャパンバードフェスティバル 2002」参加報告

事務局　箕　輪　多津男

昨年に引き続き、平成14年11月16日（土）～17日（日）に開催されたフェスティバルに、後援団体の一つとして参加いたしました。当日は好天にも恵まれ、全体としては第１回以上の参加者があったということでしたが、今回は会場がいくつか離れた場所に設けられていたこともあり、本会がブースを構えた手賀沼親水広場における人出はやや少なかったようにも感じました。



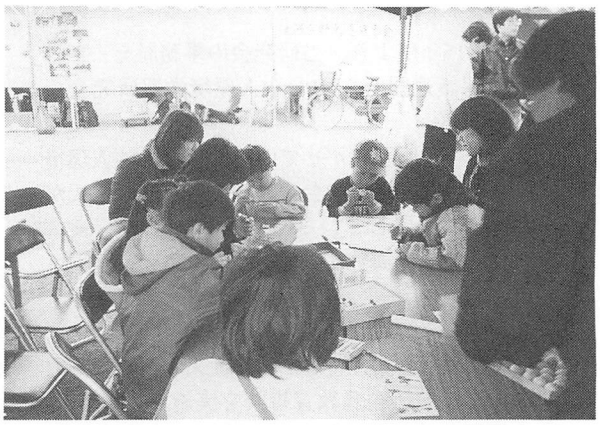
参加内容としては、子供たちを主な対象としたバードコールの工作教室、および鳥の鳴き声をあてる択一式のクイズを行いました。

実施にあたっては、前回同様、「環境学習研究会」の全面的なご協力をいただき、材料の準備等に関しても同会の島田親吾理事長や松田美和子理事に大変お世話になりました。

本会からは、杉浦会長、長屋常務理事、そして堤常務理事が、運営と実際の指導に参加しました。

２日間にわたる参加者は、親子づれを中心に延べで約250名にものぼり、かなり盛況でした。また、出来上がったバードコールを鳴らしたり、あるいは各自が思い思いに描いた鳥のデザインを互いに見せあったりと、それぞれが笑顔でブースを後にする姿が大変印象に残りました。

また、16日（土）には、杉浦会長が「全国野生生物保護実績発表大会」の審査員として、また島田副会長が千葉県自然保護課主催の「千葉県愛鳥教育指導者研修会」の講師として、それぞれ別会場で指導に当たりました。どちらもフェスティバルに合わせて開催されたのは初めてということでしたが、内容的には大変充実したものになったようです。



第３回のフェスティバルにも、また新たなアイディアを持って参加できればと考えておりますが、今後このフェスティバルはさらに大きな催しへと発展していくことが予想されます。まだご覧になっていない会員や関係者の方々にも、ぜひ、次回、ご来場になることをお薦めしたいと思います。

平成14年度 千葉県愛鳥教育指導者研修会

千葉県環境生活部自然保護課　鳥獣管理対策室　鳥獣保護班　根本　順子

千葉県自然保護課では、県内の学校における愛鳥活動を促進するため、愛鳥モデル校等の指導者を対象にした研修会を実施しています。平成14年度は、11月16日（土）13時から我孫子市生涯学習センター第４学習室で、講師に全国愛鳥教育研究会副会長の島田利子先生をお招きし開催しましたので、研修会の様子をご紹介します。

午前中は環境省及び財団法人日本鳥類保護連盟が主催する「第37回全国野生生物保護実績発表大会」を、午後は手賀沼親水広場に移動して「ジャパンバードフェスティバル2002」を併せて見学できるよう日程を組みました。参加された５名の先生方は、授業参観や学校行事後のご多忙の中、また休日であるにも拘わらず自主参加されるなど、それぞれに時間を割いて参集してくださいました。

○各校の取組み事例等について

【千葉未来高等学校】

作物被害について10件程度の農家にアンケートをとってみた。種をまいたそばからつつかれてしまうとのキジ被害の声が数件あった。

不登校の生徒に餌台の管理をまかせたら、餌をやるために学校に来なければならないという気持ちから学校へ来るようになった。

【国分高等学校】

地域に根ざした生物なのかどうかの視点を重視している。生物がいることと生物の多様性は別であり、ただビオトープに生物を放して増やす方法に疑問を感じている。一見、立派なビオトープは３年目以降衰退していく傾向にある。国分高校では、持続的な環境を考えながら毎年１箇所ずつ整備している。抜け殻の同定で、ヤブヤンマ、ハラビロトンボ等めずらしいトンボが生息していることがわかった。

ツバメ調査では、市川市全域で営巣場所を調査した。また、ネイチャーレポート（夏休みの課題）では、インターネットや本を写すのは不可とし、自分でつくりあげる力を養っている。

【舞浜小学校】

旧江戸川、三宅川が東京湾にそそいでおり、市内最大の公園もある。学区内に「東京ディズニーランド」「東京ディズニーシー」があり、鳥が沢山飛来しているようだ。

総合学習のテーマに鳥も入れてほしいと提案してみたが、他に多くの課題があってなかなか後から入る余裕がない。

【坂畑小学校】

PTAボランティアと共にビオトープを整備している。

工場の煤煙のせいか、今年度夏は鳥が見られなかった。市が整備している緑地公園に特別学級の児童と木の実を拾いに行くと鳥がいるのがわかるが、１年生58人を連れて行くと静かにできないので鳥がいなくなってしまう。

６年生で巣箱をつくってみた。また、双眼鏡での観察を試みているがなかなか姿をとらえるのは難しい。

【東浪見小学校】

メダカ探検隊を組織して、メダカを捕まえて学校に持ってきてもらったが、育ててみたらメダカではなかった。

町の賛同者で構成している「ネイチャークラブ」で休耕田の活用を行っている。

プールにギンヤンマのヤゴが500もいた。

６年生「自然の図鑑づくり」ではデジカメを渡している。野鳥クラブでは傷病鳥の世話をしている。

○神奈川県での取組紹介

講師：島田利子先生（神奈川県渋沢小学校）

・教師の組織づくり、子どもの委員会づくりから始めてみよう。

・ツバメ調査は、１年間で結果考察まで一連の流れで取り組める。

・子どもが自分で双眼鏡の視野に鳥を入れるのは難しいので、教師がスコープをセットしてのぞかせるとよい。

・教師の研修を行い、これだけは覚えてほしい鳥10種をマスターしてもらう。

・子どもが図鑑を利用するのは難しい。下敷き（野鳥シート）の方が実際的で活用しやすい。

・えさ台は、設置する場所やえさの種類によって来る鳥が異なるので工夫してみてほしい。

・PTA活動でえさ台をつくると、親ははりきって取り組んでくれる。渋沢小ではPTA会長宅が工務店だったので、いらない木端をたくさん提供してもらった。

・講演会や探鳥会を、愛鳥週間中に実施してみる。

・各学年で、ポイントを絞って鳥のテーマの授業をしてみる。

・国語の教科書で鳥をあつかっている文章がけっこうある。また、音楽で「カッコウ」「トンビ」などの歌を学ぶこともある。そういった際に、その鳥の生態を勉強してみるのもよい。

・昨年のサッカーのワールドカップ大会では日本代表のマークがカラス（日本神話に登場する三本足のヤタガラス）だったが、そういう話題性のあるところから子どもの興味をひくのも一つの方法である。

・神奈川県では県指定の愛鳥モデル校になっても予算は０だが、秦野市からは愛鳥モデル校に年間８万円で２年間の支給がある。

・鳥に関する授業をするにしても、教材や備品を入手することがなかなか難しいのが現状ではある。しかし、あの手この手を使って捻出してみる。例えば、スポンサーを見つける、懸賞金を見つける。環境省でも講師派遣制度がある。サントリーでも備品貸し出しをしている。神奈川県の獣医学会が活動のための資金提供をしてくれることになっている。緑財団も支援してくれている。

・秦野市グランドホテルでは無料でロビーに掲示をさせてくれるので、野鳥新聞等を掲示している。

・地元の不動産屋が、展示場所を提供してくれた。また、全国大会で発表したと話したら、活動助成として総額100万円を物品で寄付してくれた。地元企業の日立等の大会社が協力してくれる場合もある。児童生徒の親の会社などをあたってみたらどうか。

・給料の端数をプールして、市民活動を資金面で応援してくれる会社がある。今度、渋沢小学校は20万円を活動費として支援してもらえることになった。

・神奈川県では環境教育研究発表会（先生が対象）を実施している。また、野生生物保護実績発表神奈川県大会（生徒が対象）では、最優秀賞は知事賞であるが、その他の全ての参加団体に緑財団賞を渡している。

・不登校の子どもにスコープを貸してあげたところ、これがきっかけで鳥に興味を持ち、探鳥会以降学校へ来るようになったケースがある。

千葉県自然保護課では、これからも愛鳥活動に取り組む学校を支援し、情報交換の場などを提供していきたいと考えております。

また、今回の研修会で島田先生のお話にあった「野鳥シート」約330枚を、㈶日本鳥類保護連盟千葉県支部の助成により希望のあった愛鳥モデル校に配布したところです。

今後とも愛鳥思想の普及啓発及び自然保護教育の推進にご協力くださいますようお願いいたします。

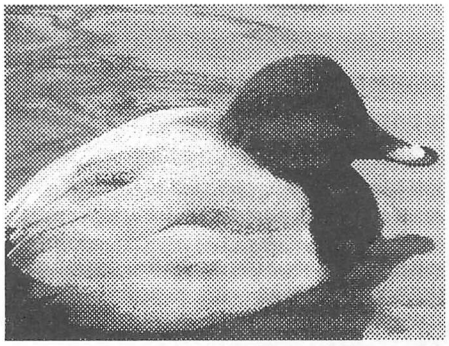
研修会の様子

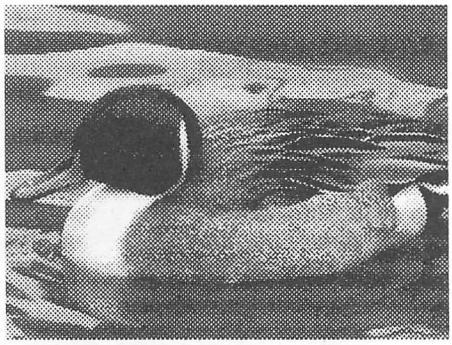
国分高等学校　ネイチャーレポート

第３回
環境教育研修会
in YOKOHAMA

～教師のためのバードウォッチング講座～

YOKOHAMAの自然を生かした
環境教育プログラムの
実践をしてみませんか？





◎日　　時　平成１５年２月１５日（土）１０：００～１２：００

◎場　　所　長浜公園野鳥観察園

◎参　加　費　５００円（保険料・資料代等）

◎主　　催　全国愛鳥教育研究会

［事務局：東京都杉並区和田3-54-5　（財）日本鳥類保護連盟内］

1　カモウォッチングは小学生に最適！

◎　なぜ，カモウォッチングが小学生向きなのか？

［だって1］　カモは大きい！

［だって2］　カモは動きが素早くない！

［だって3］　カモは木の中に隠れない！

［だって4］　カモはほとんどが渡り鳥！

［だって5］　横浜の小学校は川・海の環境に恵まれている！

だから・・・小学生でも観察しやすい！
総合的な時間で扱いやすい！

2　双眼鏡・望遠鏡の使い方を知ろう！

◎　めがねをかけている子とかけていない子の二つのグループに分けよう

[双眼鏡]

・7～10倍・広視界・ハイアイポイントが扱いやすい。

・対物レンズが大きい物は明るいが，子どもには重すぎる。

・メガネをかけている子にはアイキャップを折るようにする。

・アイマスクのように見えてはダメ。視野が丸くなるように。

・左右の視力の違いを補正しよう。

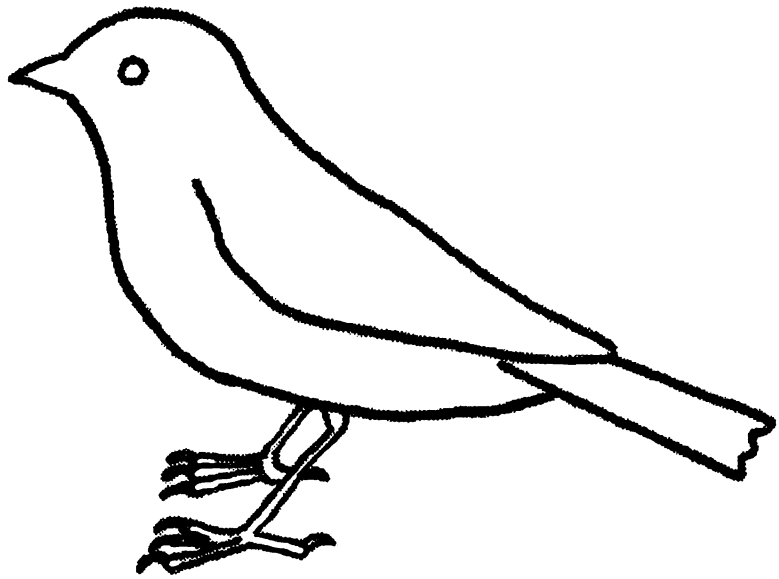
[望遠鏡]

・パン棒から手を離す時は，必ずストッパーを締めてから。

用具を正しく扱って楽しいバードウォッチングを

3　知っているようで・・・

◎　「スズメとカラスくらいしかわからないなぁ」とは言いますが・・・。



知っているようで，知らないってことは，よくあります。
今日はじっくり観察しましょう！

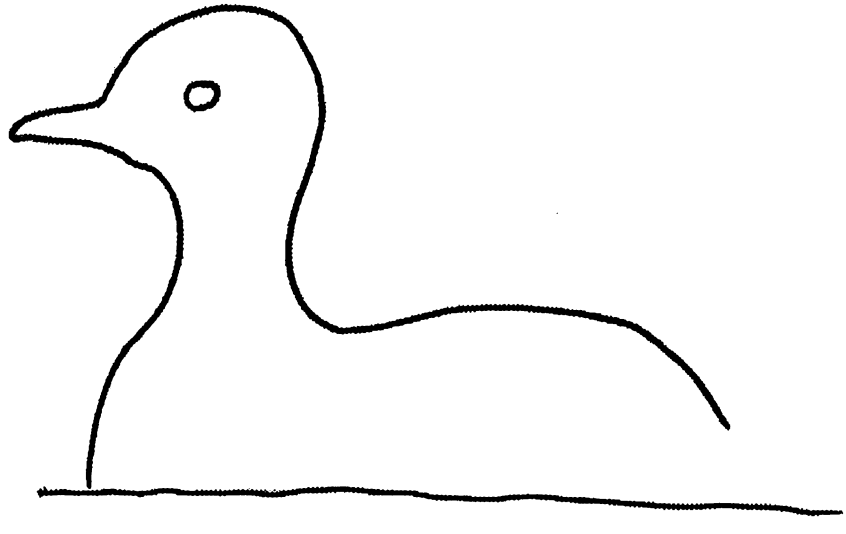
4　伝授！カモを見分けるコツ　～カモをパーツに分けよ～

◎　「先生，あれ，なんていう鳥？」　子どもは，まず，そこから始まる

・　*名前を教えるのではなく，見分け方を教えよう。*

[パズルを使って]

[カモンタージュ]



・メスは難易度が高い。まずは派手な色彩のオスから導入。

・図鑑よりも野鳥シート！種類も少なく，一度に見ることができ，下じきにもなる！

まず，カモの体をパーツごとに観察しよう！

5　あなたも紅白体験してみましょ

◎　野鳥のカウント体験。でも，いつもカウンターがあるとは限りません。

1. カウンターを使って

2. カウンターを使わずにおおよその数を数えてみましょう。

・パッと見ての予想　　羽

・おおよその数　　羽

・カウンターを使って　　羽

・正解は・・・・　　羽

6　行動チェック①　～カモのエサの採り方を観察しよう～

◎　あなたが見ているカモは　水面派？　水中派？

[行動の違い]

・エサの採り方は？

・飛び立ち方は？

[体のつくりの違い]

・足の位置は？

・尾の向きは？

・陸に上がった時の姿勢は？

カモは，それぞれの生息場所に適した体のつくりや行動をしている

7　行動チェック②　～カモのラブアタックを観察しよう～

◎　カモは越冬地で求愛行動をしてしまう変わった鳥です

メスの周りでオスたちがヘンな行動をし始めたら要注意！ラブアタック開始です。

①　囲い込んで追いかける，「いつまでも君を離さないよ」型

②　どうだ！どうだ！の「威張り」型

③　早くしよっ！の「積極誘惑」型

④　見て！見て！俺のカッコイイ羽根！の「自慢」型

・メスの態度はどうなんだろう？？？
・どうして，そんなに早くから求愛するの？

カモの，アタック法はさまざま。
でも，とにかく表現上手のストレート系！？

8　行動チェック③
～自分で見つけよう！カモのおもしろ行動～

◎　子どもと同じで，性格いろいろ。行動さまざま。

[発見！おもしろ行動1]

[発見！おもしろ行動2]

[発見！おもしろ行動3]

[発見！おもしろ行動4]

1羽1羽，みんな個性的。
行動を見れば，性格までわかっちゃう！？

9　行動チェック④　　～　カモカモビンゴ　～

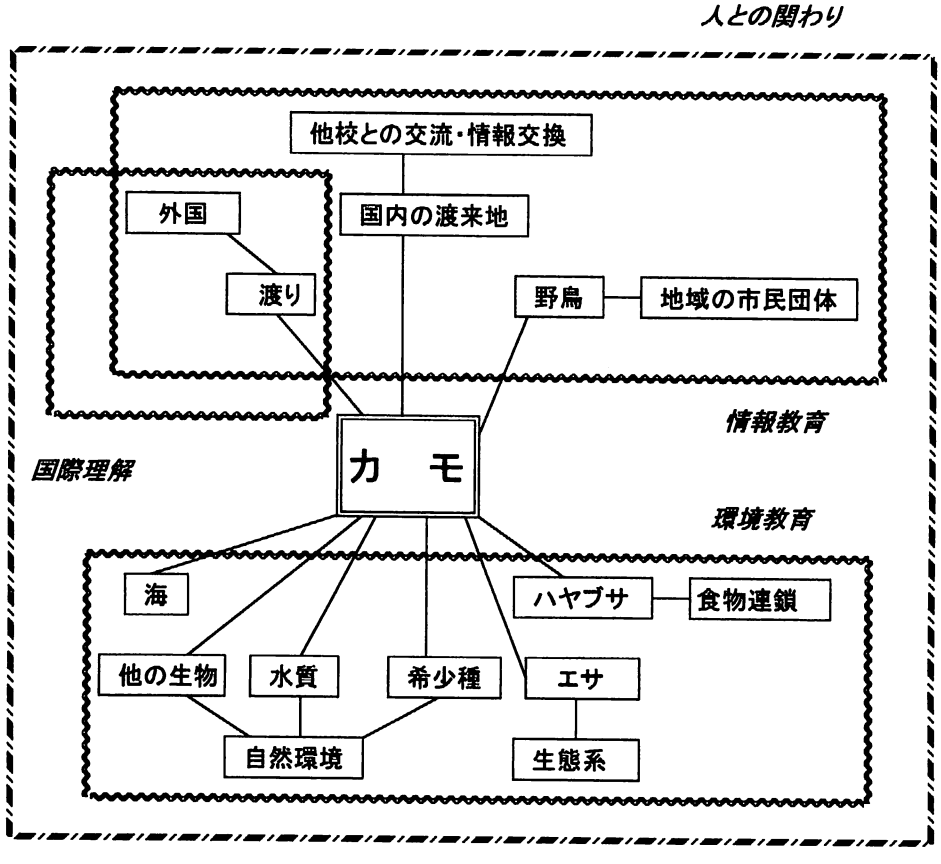
◎　お気に入りのカモに密着取材！

1. 自分のお気に入りのカモを1羽決めて，そのカモの行動を次の中から予想し9個選ぼう。
   A. 求愛行動をする　B. 水面でエサを採る　C. けんかをする　D. 水浴びをする
   E. 飛び立つ　F. 水にもぐってエサを採る　G. 首を出したまま目を閉じて寝る
   H. 首を羽根の中に入れて休息　I. 鳴く　J. 水面で羽ばたく　K. 羽つぐろいをする
   L. 羽を伸ばす　M. 歩く　N. 頭をかく　O. 交尾をする　P. その他（　　）
2. その記号をマスに書く。
3. みんなで一斉に観察開始！予想した行動を観察することができたら，マスに○をして，感想や詳しい行動を記録する。
4. 時間内にビンゴになった列数で勝負。最後まで勝負はわからないぞ！

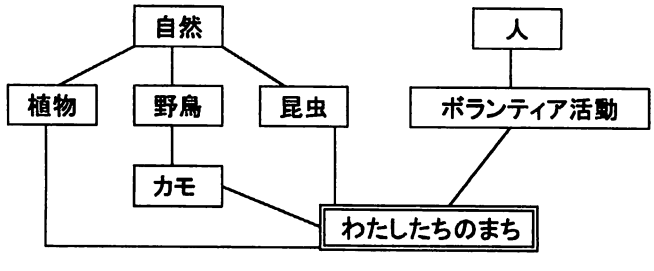
１０　カモを通して学習を総合的に考えてみよう

◎　カモには，たくさんの可能性がある！

[構想１:カモからテーマを広げる場合]



[構想２:カモを通してテーマを深める場合]
(例:地域学習をテーマに)



中国の朱鷺そして能登の朱鷺

中国の朱鷺保護に尽力されている本会顧問村本義雄氏から、その活動の様子を伝える資料が送られてきましたので、ご紹介いたします。

送られてきた資料の一つは、中国の小学生からの手紙です。村本氏の活動の経緯の一端が読み取れます。二つ目は、教育環境整備事業の一つである学習机の贈呈に関する写真です。贈呈式の際の現地の朱鷺の様子を写した写真も含まれています。三つ目は、村本氏が作成された絵はがき「朱鷺　トキよ未来にはばたけ　中国陝西省洋県の朱鷺」です。四つ目は、村本氏の地元石川県羽咋市での活動を伝える新聞記事です。

村本氏は、朱鷺保護を進めるには現地の方々の協力が不可欠であるとの考えに立ち、人々の心に愛鳥思想が育まれるよう、また朱鷺保護の実際の労苦に報いるためにと、現地の学校の教育環境整備にまで支援の手を差し伸べるなど、朱鷺保護のための総合的な支援活動を展開していらっしゃいます。

村本おじいさん　お元気ですか

私達は、陝西省洋県貫渓鎮平浜村小学校の児童です。私達の学校は、朱鷺の遊蕩地にあります。つまり、朱鷺の遊蕩地の小学生です。私達は、日本のおじいさん、あなたは、私達の故郷の朱鷺をとても愛し、朱鷺保護分野で沢山の知識をお持ちと聞いています。私達の故郷へも来てくださったら、本当にうれしいです。

おじいさんの愛鳥の心、世界の珍禽朱鷺の保護活動は、私達の間の距離を近付けました。私達は、あなたと交流し、故郷の朱鷺のことを話し合いたいです。

私達の学校は、漢江河の北岸1--の所にあります。清らかな漢江の水は千里、万里を経て我が故郷の門前を流れていきます。住民は、代々稲作をし、野菜を育てています。漢江中の小木舟、河辺の柳林、岸辺の緑草地、水中の白砂州、これらは我々がいつも生活しているところです。漢江のほとりに朱鷺、水鴨、白鷺などを見ることは我々のこの上ない楽しみです。

我々の故郷は、1990年以来朱鷺の数が年々増え、この近年は、朱鷺の遊蕩地の中心となり、30羽近くの朱鷺が常時活動しています。滞在時間も長くなり、安定して活動しています。世界の極危動物保護のため、我々の故郷で棲息、繁殖させ、人類文明事業に貢献するため、我々学校は1998年、朱鷺保護観察班を作りました。

我々は、朱鷺の活動季節の特徴に基づく学校の計画に沿って、漢江一帯を不定期的に観察を実施しています。実地観察を通して、我々は、朱鷺の基本習性が一定であることを理解しました。漢江沿岸で活動中の朱鷺の主な食料は、小魚、小蛯、草地の中の昆虫等です。彼と白鷺、茶鷺、黄鴨、赤麻鴨等小禽類は一緒に餌をとっています。朱鷺は、餌を食べたり、他を追い掛けたり、人々を十分楽しませてくれます。

毎年、お正月が過ぎ、だんだん暖かくなると、朱鷺は我々の故郷での活動が更に頻繁になり、漢江沿岸で、悠悠自適に餌を漁り、追い掛けたり、遊び戯れている様子を見ることは、朱鷺の故郷の小学生として十分自慢です。

村本おじいさん！あなたは長年日本において、朱鷺の保護活動をしていましたね。世界の珍禽保護のため、世界の極危動物朱鷺保護のため長年、弛まず努力されたことを私達は尊敬します。私達は、あなたが慈悲深い、善良なお爺さんだと想像しています。私達は、心からあなたが、我々の学校を訪問し、我々に朱鷺保護分野における知識を更に多く伝授して下さることを希望します。また、お爺さんが、我々の学校の学習条件改善のために支援して下さることを希望します。

我々の学校は、現在、児童の学習条件は比較的悪いです。校舎の危険箇所を修理するお金がありません。学習机も壊れています。しかし、私達の志は大きいです。我々の生活を愛し、学習を熱心にし、朱鷺を愛し、環境の美化に毎日取り組みます。

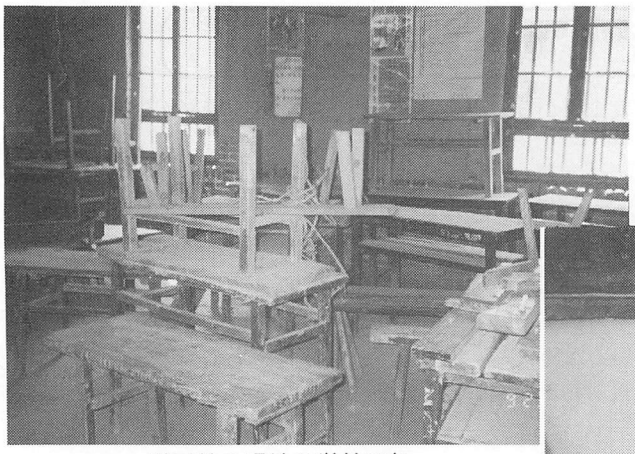
人間は、ただ1個の地球に住んでいます。更に美しく、更に多彩にし、全世界人民の心が一つになることを願っています。

敬愛する村本お爺さん！来てください。歓迎します。

洋県貫渓鎮平渓村小学校　4年生

児童代表　何　丹

2002年3月22日



贈呈前の現地の学校の机

この度贈呈された新しい机

贈呈式の模様

村本義雄氏が設立し会長を務める「特定非営利活動法人日本中国朱鷺保護協会」は、以下の通りです。

〒925-0011　石川県羽咋市上中山町レ－８
TEL&FAX　０７６７－２４－１３５１
e-mail: info@tokihogo.gr.jp
URL: http://www.tokihogo.gr.jp/

村本義雄氏撮影制作による絵はがきです。この他にも６枚あり、実際には10枚一組、オールカラーです。

一組1,000円、送料90円で販売されています。

〔問い合わせ先〕

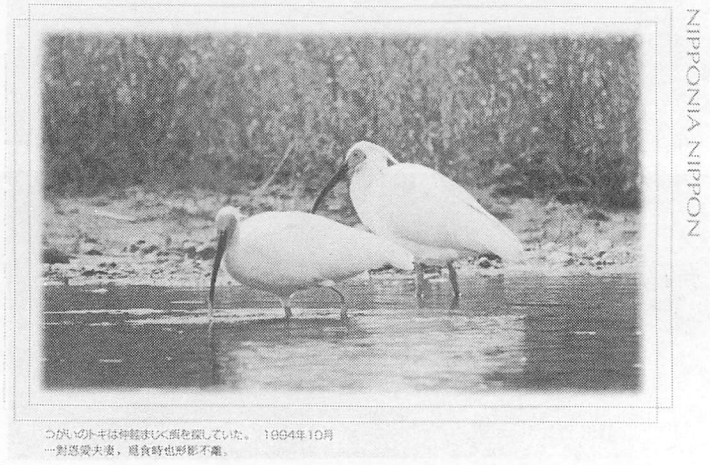
〒925-0011

石川県羽咋市上中山町レ－８

日本中国朱鷺保護協会

村本義雄

TEL&FAX ０７６７－２４－１３５１



つがいのトキは仲睦まじく巣を探していた。 1994年10月
…對恩愛夫妻，覓食時也形影不離。

餌生昆虫を求めて刈り入れ後の水田へと移動する。 1994年10月
刈取割後的水田覓去尋找除草昆虫。

1993年、三岳河村で2羽孵化した雛のうち、育ちの悪い(左)1羽は死んだ。 1993年5月
1993年、在三岳河村移化出的獨只小朱鷺。種隊的是、其中一隻(左)因何育不良死去了。

NIPPONIA NIPPON

洋樂、三岳河村的小朱鷺棲息地的一部。手前左の建物は、三岳河朱鷺保護観察所。 1994年5月
洋樂三岳河村朱鷺棲息地的一角。左前方的建物是三岳河村朱鷺観察所。

NIPPONIA NIPPON

北國新聞　平成 14(2002)年 12 月 7 日

里で能登をトキ舞う日夢

トキをテーマに発表する生徒
＝羽咋市羽咋中

環境問題テーマに学習の成果を発表

―羽咋中1年の河辺さんら3人―

羽咋市羽咋中で六日、一年生の総合的な学習の発表会が開かれ、環境問題をテーマに取り組んだグループが、再び能登にトキが舞う日の来る願いを込めて環境保全の大切さを訴えた。

トキについて発表したのは河辺志帆さん、海渡恵子さん、田島沙織さんの三人。河辺さんらはかつて同市の眉丈山をはじめ能登に生息していたトキがなぜ絶滅したのかなどをNPO（特定非営利活動）法人・日中朱鷺保護協会長の村本義雄さん(七)＝同市上中山町＝に四月から指導を受け、学習を重ねてきた。

三人は、村本さんから借りたトキの模型や自分たちで描いた図を使い、乱獲や農薬、自然環境の変化によってトキが姿を消したことを紹介した。そして、「人間の住みやすい環境を守ることが、トキの生息にもつながる」と発表した。

発表会には一年生百六十人のほか、村本さんも出席し、「みんなが力を合わせて環境問題に取り組んでくれれば、将来、トキが能登に舞うのも夢ではない」と生徒らに呼び掛けた。

もりまき通信(18)

～鳥にまつわる子供の名～

自然観察指導員　　森　真希

●お年賀状の子供の笑顔

日本の文化の一つである、お年賀状の挨拶。我が家にも、今年も沢山の葉書が届いた。自分自身も所帯を持ち、子供もいる年頃になると、学生の頃とは変わって、所帯持ちの方からのものが増えてきた。そして、近年は、パソコンの普及により、自宅で印刷したオリジナル作品のものが結構な割合を占めるようになってきている。

これらのお年賀状を一枚一枚手にとって読んでいくと、目に飛び込んでくるのが愛くるしい赤ちゃんの笑顔の超ドアップ写真。一児の母である私は、お年賀状で我が子をお披露目するご両親の心理がよ～く理解できる。これは親になってみないと共感しにくいことなのかもしれないが。

また、友人・知人から「結婚しました」とか「家族が増えました」とかいった報告を、お年賀状で受けることが多い。そして、私達夫婦の友人・知人には、生き物や鳥が好きな方が多い。

それで、今回は、生き物好きな方々が愛と希望を込めて命名したお子様のお名前や、書籍で紹介されていた鳥にまつわる子供の名前について紹介したいと思う。

●しのりちゃん

漢字で書くと「汐恭ちゃん」、東京都に在住の、K御夫妻の長女様のお名前である。女の子御誕生のお知らせを聞いた時、

「お名前はもう決めたんですか？」

と尋ねた。すると、ご主人様のお返事は、

「うん、ハーレクィン・ダックにしたよ。」

私は当時（今もだが）、鳥の英名が頭に入っていなかったので、それが「シノリガモ」と気付くのに随分時間がかかった。奥様の鶴の一声で決定されたとか。

ご両親様の解説によると、「生命の源である水に恵まれるように」と、「さんずい」のついた字を探し、字体の強さ・意味・画数などを考慮して「汐恭」と名付けられたとのこと。「汐」は潮の女性表記で「夕方の潮」の意味を含み、「恭」は「うやうやしい」や「集うところ」の意味があり、名字に花の名があるので、「華の咲く風景の、凪いだ夕潮の元にシノリガモが集い安らぐような、心優しく包み込むような女性」になって欲しいとの願いを娘に込めました、とのこと。

図鑑や写真集でシノリガモを見たり、実際に観察したりする度に、汐恭ちゃんの可愛い笑顔が浮かんできそうである。

●あねはちゃん

漢字で書くと「明音羽ちゃん」、香川県在住のＩ御夫妻の長女様のお名前。メールでご出産のお知らせを頂き、お名前を拝見した時、私も主人も、

「あ、アネハヅルだ！」

と名の元になった鳥の名を叫んでしまった。頭の中には、世界最高峰のヒマラヤを上昇気流をつかんで越えていくアネハヅルの姿が浮かんだ。

野鳥の観察会で知り合うことになったＩ御夫妻は、お子様に野鳥の名を付けたいと希望されていたとのこと。奥様の解説によりますと、

「毎冬九州へ探鳥に出掛け、出水の万を越すツルの中にいる1羽のアネハヅルを見つけた感動!!　それは幼鳥でしたがとても凛としており、小さなその体に、ヒマラヤを越えるという激しい渡りをする力強さを感じずにはいられませんでした。」

当てる漢字については、このようなお話を頂いた。

「本来は『姉羽』という字なのですが、そのまま丸ごと頂くのはあまりにアネハヅルに失礼かと。それに親としては欲張って沢山の意味合いを込めてつけてあげたい。『アネハ』の『ハ』は野鳥の羽をイメージして、『ネ』はバードウォッチングにはまる前に（奥様が）琴を趣味にしていたので、音楽をイメージ、悩んだのは『ア』です。亜、愛、安、阿…いろいろ迷いましたが、その筋の本で苗字との画数なども調べてみると『明』が合うではありませんか。『明』るい『音』で『羽』ばたく…元気そうな、未来を自分で切り開いて行けそうな、それでいて女の子らしいイメージ！　妊娠後期には決定して

おり、ずっとお腹にいる時から呼びかけていました。」

このお話を伺って、なるほど～と感動、納得という気分であった。私と主人は、鹿児島の出水に行った折り、残念ながら野生のアネハヅルには会えなかった。しかし、動物園で檻越しに見た時、なんて優美なツルだろうと見入ったことがある。きっと素敵な女性になるだろうと、アネハヅルを思い浮かべながら、彼女の成長を楽しみにしたいと思う。

●しょうやくん

漢字で書くと「翔野くん」、神奈川県在住のＩ御夫妻の長男様のお名前である。御夫妻は海外旅行でも、鳥類標識調査に参加されるほど鳥が大好きな方である。「翔」という漢字は、種名そのものが含まれているわけではないが、鳥が羽ばたく様子が連想できるので、鳥にちなんだ名前の一つとして取り上げてみた。

御夫妻の解説では、「野に飛ぶ野鳥のように自由に羽ばたいてほしい。」という願いが込められている。それでも、決定するまでは色々と迷われたとか。お父様のお名前に「也」という漢字が使われているので「翔也」にしようか、「翔」は流行しているようだから別のものにしようか、鳥の名前で何とかならないかなどなど。妊娠７ヵ月頃から考え始め、予定日より10日早い出産。その後、画数も良く、インターネットの生命判断でも良い情報が得られた「翔野」に決定されたとのこと。

翔野くんの、元気に羽ばたくその姿が目に浮かびそうである。

●みうちゃん

漢字で書くと「海羽ちゃん」、東京都在住のＹ御夫妻のお二人目のお子様のお名前。奥様は、私達夫婦にとって、大学のサークルの先輩に当たる。「羽」という漢字も、もちろん鳥にちなむので、迷わず先輩にお声をかけてみた。

奥様こと先輩の解説によると、

「『海羽』の名は、８月生まれの季節感と、母親である自分の名前から『海』をとり、『羽』はイメージとして明るい海原を白い羽を広げて羽ばたいている鳥です。海原を飛び交う鳥のように、おおらかで心の広い人に育ってくれたら、という願いを込めています。私自身が鳥が好きなので、鳥にちなんだ名前がつけられたことも大変満足していますし、とても気に入っています。父親である主人は、女の子だったら母親の名前から一字取りたいと、それだけは主張しておりました。ので、父親も大満足。」とのこと。

お子様のお名前を目にした時、入道雲を背景に、青い海を悠々と羽ばたくミズナギドリやアジサシ、カモメなどの姿が脳裏に浮かんだ。海と夏が似合う素敵な女性になりそうである。

●つぐみちゃん

漢字で書くと「亜美ちゃん」、実は彼女は、私達夫婦にとってサークルの同期の仲間である。現在、東京都に在住、知り合って11年の友人だ。彼女にも命名のエピソードを聞いてみた。「鳥好きの方には満足してもらえないかもよー」との前書きがあっての解説は以下の通り。

「母がアジアの亜が好きだったことと、当時ＪＴＢが“ディスカバー・ジャパン”というキャンペーンをやっていたのにちなんで、これからはアジアの時代だから“美しいアジアの発見”という願いを込めて亜美という名前を付けたのだとか。亜という字には、亜寒帯・亜熱帯とかいうように“２番目の”という意味があり、漢和辞典をみると確かに“つ・ぐ”という訓読みが有るのです。そこから、この名前は“２番目に美しい”という意味にもとれるのです。そんなわけで、つぐみという名前は鳥のツグミとは関係がなく、そもそも私の両親はツグミを見たことすらないほどに生き物オンチです。という私も、ついこの間キャンプサイトで初めてツグミを見つけ、本で調べてやっとツグミだとわかったという有り様です。でも、私は“だるまさんが、ころんだ”をしているような歩き方をする鶇がすっかり気に入りました。」

な～るほど！　私はてっきり鳥由来の命名だと思い込んでいたが、これまた納得の命名秘話である。

●他にも色々

手元にある「赤ちゃんの名前大百科」（ナツメ社）をめくってみた。鳥にちなんだテーマで探してみると、これまた色々と紹介されていた。

「翔」の字では、「翔太郎」「翔一」「翔太」「翔吾」「翔馬」「翔香」など。また、「千翔（ちか）」「美翔（みか）」「有翔（ゆか）」など、「翔」を「かける」と読ませる名もあった。

「つばさくん」と読める名前としては、「翼」

「羽」「飛翔」「羽翼」など。ルビが欲しくなる組み合わせもある。

「はやとくん」は、鳥のイメージとしては、最も分かりやすいものの一つかもしれない。漢字は「隼」「隼人」が当てられる。

「鷹」を使ったものには、「鷹也（たかや）」「鷹平（ようへい）」があった。

ハクチョウやガンの仲間を指す「鴻」は「鴻之助」で「こうのすけ」、また「鴻」だけで「ひろし」と読むものもある。

「鶴」では、「田鶴彦」で「たづひこ」というアンティークな響きを持つものもあった。

「鳥」の字をストレートに使ったものでは、「鳥音」で「とりね」。種名を使ったものでは、「あとり」「つばめ」。

変わったところで「和蔵」。これは「わぞう」がフランス語で「鳥」を意味するからだとか。

汐恭ちゃんのお父様からは「ひわ」「こべに」など小鳥の名前が候補に挙がったとの情報も。他に「ましこ」「こるり」など。こうしてみると、鳥の名前には女の子向けのものが多いような気もする。

●ちなみに我が家は

娘の名は「百合香」という。主人の母の名前「百合子」から頂いた名前だ。娘にとっては、おばあちゃんから名前をもらったことになる。娘は7月生まれであるのだが、ユリの仲間は夏に開花するものが多く、その季節を表す植物と言えること。また、ユリ科植物には、タマネギ、アスパラガス、ニンニク、ネギ、ラッキョウといった食材として有用なものが多いこと。そういったことから、自然や生き物を表す漢字を使いたいという当初の希望に加えて、人の役に立つような人になってほしいという願いも込めて、やっとの思いで決めることができた名だ。

親から子供への最大の贈り物とも言える「名前」。みなさんはどんな命名秘話をお持ちだろうか。これからニ世誕生のご予定のある鳥好きな方への参考情報になれば幸いである。

大切なお子様のお名前をここに紹介させて頂くことを快諾して頂きました御家族の皆様に、深く感謝申し上げます。

書評

『タゲリ舞う里に』

七尾　純著、むかいながまさ絵　2002年11月
あかね書房、定価（本体）1,300円

事務局　箕　輪　多津男

タゲリは、日本へは通常冬鳥として渡ってくるが、頭部にピンと立ったかざり羽（冠羽）を持つ姿が大変印象的な美しい鳥である。

しかし、昨今は各地で個体数が減少していることもあり、一般的にはあまり知られていないというのが実情である。そのタゲリを中心に据え、神奈川県茅ケ崎市において自然保護活動を展開している人々の姿を、生き生きと描いたノンフィクション作品が本書である。

活動の中心となっているのは「茅ケ崎野外自然史博物館」（建物のない青空博物館の意）、およびタゲリの調査を目的に設立された「三翠会」というグループで、その代表である森上義孝さんが物語の主人公になっている。

森上さんはもともと生物画家として活躍されていた方で、永年にわたり地元の風景や自然環境を見つめ続け、何よりその変化に懸念を持っておられた。

そうした中でシンボルとして浮かび上がってきたのがまさしくタゲリで、その調査と彼らの生息できる環境を保全していこうという共通の目的のもとに、上記のグループとその関係者が一丸となって行動を展開していくわけである。

殊にその中でも注目されるのは、タゲリの飛来地としての水田の減少を食いとめるために、地元の農家との協力により「湘南タゲリ米」というブランド米を生産・販売するという活動である。

そのことが農業のあり方そのものを改めて見直すとともに、タゲリの棲める自然環境の保全にトータルに結びついていくことになる。

さらには、舞台となっている茅ケ崎市のみならず、日本全国の土地利用のあり方を考える上で、一石を投じることにもつながっているように感じられる。

野鳥やその生息地を保全することを一つの目的として生産されているブランド米としては、宮城県で日本雁を保護する会が農家の方々と協力して販売している「はつかり」や、茨城県江戸崎町でオオヒシクイの保全を目的として生産されているその名も「オオヒシクイ米」、兵庫県豊岡市でコウノトリの野生復帰のためのプロジェクトの一貫として無農薬アイガモ農法によって生産されている「わしらがつくった有機米」、そしてラムサール条約の登録湿地である石川県加賀市の片野鴨池で生産され、飛来する鳥のシンボルともいえるトモエガモを冠した「加賀の鴨米ともえ」などが既に知られているが、本書に登場する「湘南タゲリ米」も含め、全国にこうした活動の輪が広がっていくことが、日本の農業や土地利用、あるいは人間と野鳥をはじめとする野生生物との共存に向けた将来の展望を開くための、重要ないしずえとなっていくに違いない。

一連の活動そのものも素晴らしいが、それを実行に移していく人々の情熱にも、つくづく感心させられる。やはり何事もその原動力となるのは、根底からそれを支える熱意であるということになるだろうか。

身近な自然を見直すことの重要性については、本会もたびたび話題に掲げてきたが、その基本を見直すための絶好の機会として、会員の方々に是非本書を手にとっていただくことをお薦めしたい。

あわせて、本書は小学生でも十分に読みこなすことができるような平易な文章で書き下ろされているので、全国の児童・生徒の皆さんにも広くお薦めしたいと思う。

川

～生命を育み流れ続ける～

事務局　箕　輪　多津男

地球上の陸地を貫くようにして生命を育む水を絶え間なく運ぶもの、それが川である。山から湧いた水を海まで運ぶ、それはある意味で地球の動脈とも言える。運ばれる水にはミネラルをはじめ多くの栄養分が溶け込んでおり、それは川に頼る生物だけでなく、やがて海に届けられた後は、そこに棲む生物をも養う力となる。

川の流れは時の流れに寄り添うように、枯れない限りその鼓動を止めることもない。川、特に大河を修飾する際に「悠久の」ということばがよく使われるが、これなどもそういった川に対する畏敬の念から来るものなのであろう。

確かに、川の前にたたずむと独特な心情に支配されることがある。静かに、あるいは激しく流れるその水面をじっと見つめていると、時に満たされたような、時に激しく揺さ振られるような、様々な感情を催す。水そのものは生命を持たないが、その動きは何より生命感に溢れている。人間のみならず生物のからだを形成している成分の多くが水分であるということも、こうした感情に響くもととなっているのかも知れない。

川は、流れる場所によってその表情を変える。山頂付近で涌く瞬間、あるいは雪どけが起こる瞬間などを起点として、それが渓流となり、時には滝を形成しながら激しく下り、山裾のあたりから次第に流れはゆるやかになり、人里や田園地帯を流れながら川幅を広げ、やがて支流を合わせながら最後に海へとたどり着く。

もちろん、地球上には様々な地形や自然環境が形成されているので、ジャングルを抜ける川もあれば、砂漠の中を貫く川もある。それぞれの地を流れる川には、それぞれの趣きがある。

同じ川であっても、時刻や天候によってその表情は変わる。朝日を受けてきらめく瞬間、穏やかな光を受けてゆったりと流れる日中、日が傾きはじめあちこちに影を落とす頃、そして夕日に赤く染まりながら、やがて闇の訪れとともにせせらぎだけがこだまするようになる。風雨の激しい時には、しぶきを上げながら水嵩を増し、日照りの続く時には逆に岸辺が大きく露出する。

川は、季節によってもその姿を大きく変える。春から夏にかけては、色とりどりの草花に囲まれ華やかな姿となり、秋には紅葉とともに哀愁を漂わせ、また、冬には一面の雪化粧の中に埋もれるように流れていく。

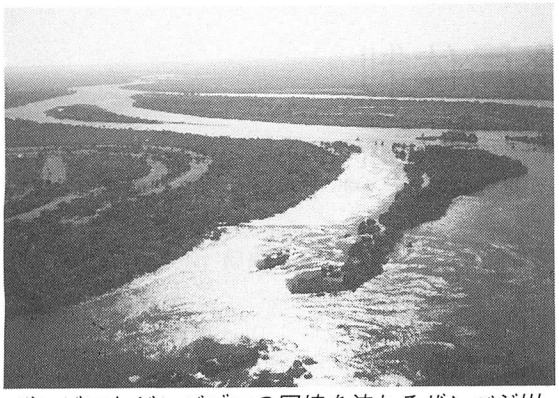
もちろん、こうした変化はわが国のような四季のはっきりとした地域に特徴的なことであり、地域によっては一年を通じてほとんど表情を変えない川もある。

何か困難にぶつかった時など、多くの方が川と向き合った経験をお持ちではないだろうか。川には、そうした人間の心や感情といったものを受けとめてくれるだけの器量と魅力があるように思われるのである。

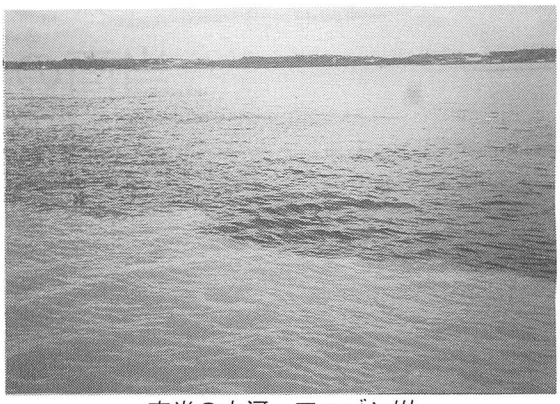
このことは多くの野生動物にとっても同様なのではないだろうか。よく「自然との対話」ということばを耳にするが、川のほとりに立って水面を見つめることは、まさにその意に適っているように感じられる。

地球の各地で、それぞれの規模とそれぞれの表情を持って流れ続ける川。その鼓動が、今、この瞬間も多くの生命を支えている。それは、誰にも身近な小川とて同じことである。だからこそ、岸辺も大地も自然のままの姿であって欲しいのである。

そうした川の本来の姿というものに想いをはせながら、これからも歩んでいきたいと思う次第である。



ザンビアとジンバブエの国境を流れるザンベジ川



南米の大河・アマゾン川

夕日に染まる悠久のナイル川

カナディアン・ロッキーを背に流れるボウ川

パラナ川とイグアス川の合流地点
（ブラジル・アルゼンチン・パラグアイの国境）

インドを流れるガンジス川

※ 続きはP31に掲載してあります。

当面の事務局体制

巻頭言で会長が述べたように、平成15年度より「NPO法人環境学習研究会」内に事務局を置かせていただくことになりました。それに伴い、事務局としての体制が以下のように変わります。

■NPO法人環境学習研究会
〒104-0061
東京都中央区銀座２－１０－１１
千成屋ビル４Ｆ
NPO法人環境学習研究会
TEL&FAX: ０３－３５４７－１６５０
e-mail: kankyo@ecok.jp
URL: http://www.ecok.jp

■全国愛鳥教育研究会事務局
〒104-0061
東京都中央区銀座２－１０－１１
千成屋ビル４Ｆ
NPO法人環境学習研究会 内
全国愛鳥教育研究会
TEL&FAX: ０３－３５４７－１６５０

事務局に全国愛鳥教育研究会のスタッフは現時点で常駐していません。将来的には、常駐スタッフを置くことを検討していきたいと考えておりますが、現時点では以下のような対応になります。

○電話

NPO法人環境学習研究会のスタッフの方が受けて下さいます。用件と連絡先（氏名、電話番号、ＦＡＸ番号など）をお話下さい。そのメモを、全国愛鳥教育研究会役員に伝達していただくようお願いしてありますので、伝達後、担当役員から改めてご連絡申し上げます。

○ＦＡＸ

NPO法人環境学習研究会のスタッフの方が受けて下さいます。内容について全国愛鳥教育研究会役員に伝達していただくようお願いしてありますので、伝達後、担当役員から改めてご連絡申し上げます。

○郵便

NPO法人環境学習研究会のポストに届きます。その後、事務局内の全国愛鳥教育研究会のポストに保管されます。原則週１回、担当役員が事務局に出向き、開封の上、処理します。

○宅配便

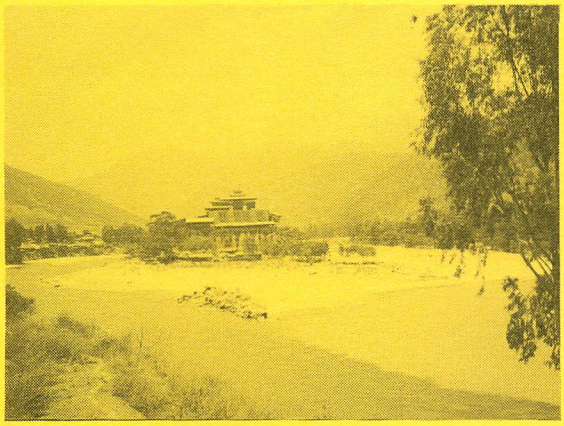
郵便の扱いに同じです。

○電子メール

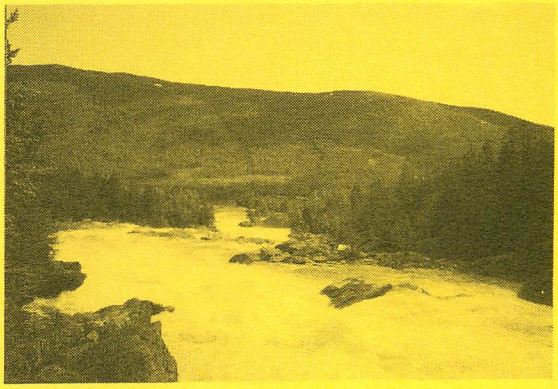
NPO法人環境学習研究会のメール（kankyo@ecok.jp）は、全国愛鳥教育研究会とは共用しませんので、こちらに送信はなさらないで下さい。

将来的に全国愛鳥教育研究会としてのメールアドレスを取得する方向で検討を進めますが、当面は、副会長の染谷優児が窓口として承ります。（kawasemi@ss.iij4u.or.jp）

会員の皆様には、不自由をおかけする面がありますが、ご理解とご協力とをお願い申し上げます。



ブータンのポ川とモ川の合流地点



ノルウェーのフィヨルドに向かう激流

編集後記

ようやく68号をお届けすることができましたが、この間に、本会としても大きな節目を迎えることになりました。巻頭言で会長が述べているように、この度、諸般の事情から、本会事務局を、長年お世話になった㈶日本鳥類保護連盟から新たにNPO法人環境学習研究会に移転することとなりました。具体的にはP30（左ページ）をご覧下さい。

なお、今後の事務局体制については、理事会で検討作業を継続していきますが、事務局作業をお手伝いいただける方を募ることも含めて、会員の皆様のご協力を切にお願い申し上げる次第です。

昨年実施された千葉県愛鳥教育指導者研修会について、担当の千葉県自然保護課の根本さんにご報告いただきました。

千葉県では、自然保護課が愛鳥教育関連の様々な行事を実施しながら、県下の愛鳥モデル校への支援を実施しています。

報告しそびれてしまいましたが、昨年８月、谷津干潟自然観察センターにて、「地球を旅する渡り鳥たち　シギ・チドリ体験学習教材」についての研修会も開催しています。

なお、この教材については、機会を見てぜひ取り上げたいと考えています。

「第３回 環境教育研修会 in YOKOHAMA」は、本会常務理事の堤達俊氏が手掛けてくださっているもので、横浜市の小学校教員を対象にするという点で、地域向けの愛鳥教育の在り方を探る意味からも重要な行事となっています。

今回は、とりあえず当日使用したテキストのみを掲載しましたが、次号で研修会の様子についての報告ができればと考えています。

本会顧問の村本義雄氏からは、日本中国朱鷺保護協会の活動について毎回お知らせいただいています。朱鷺保護も愛鳥教育を推進していく上で、重要なテーマであると言えましょう。HPもありますので、ぜひご覧下さい。

もりまき通信では、今回もまたユニークなテーマでご執筆いただきました。ありがとうございました。

（染谷）

愛鳥教育 No.68

平成15(2003)年6月30日

発行人　杉浦嘉雄
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒104-0061 東京都中央区銀座2-10-11
千成屋ビル4F
NPO法人環境学習研究会内
電　話　０３－３５４７－１６５０
ＦＡＸ　０３－３５４７－１６５０
会　費　３,０００円
郵便振替　００１８０－７－１２４４２
印刷所　祐　文　社